

ニジェール支所便り

2016年5月号

【編集長】山形支所長 【編集担当】佐々木企画調査員

Tel: (227) 2073 5569 Fax: (227) 2073 2985 E-mail: ni_oso_rep@jica.go.jp

今月のトピック



- 支所からのひとこと
～ブルキナファソ事務所異動にあたって～
- プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介
 - ・みんなの学校:住民参加を通じた教育開発プロジェクト(EPTⅢ)
 - ・第5回 誰でもわかるみんなの学校プロジェクトのモデル解説 ～フォーラムアプローチ～
- ニジェール国内の出来事
～暑さをチャンスに！～

支所からのひとこと ～ブルキナファソ事務所異動にあたって～

昨年 2015 年 4 月末、暑さがピークに向けてグングン加速している真っ只中に赴任しました。これが何度目の赴任なのかすら自分でも分からなくなるほど、日本とニジェールの行き来を十数年来繰り返してきましたが、それから早いのもう 1 年が経過しようとしています。それまでは、南西部の村落での活動や調査が主でしたが、この一年はまさに事務所と自宅を往復する毎日、赴任した当初はかなりフラストレーションを感じたものです。それでもこの一年間、充実感を持って支所での仕事に打ち込むことができたのもひとえに支所長、同僚の中川企画調査員、優秀なナショナル・スタッフの方々、そして家族の支えがあったお蔭です。この場を借りて、お礼申し上げます。



さて、これからは標題にもあります通り、ニジェールのお隣ブルキナファソからこれまでと同様に、ニジェールの農業・村落開発分野を担当していきます。慣れ親しんだニジェールを離れるのは正直辛く、新天地での生活に不安もありますが、これも新たな挑戦と捉え、自らを奮い立たせている、そんな心境です。とはいいつつも、ブルキナファソでは現在、ゴマ生産支援・技術協力プロジェクト(2014～2019)がワガドゥグおよびボボデュラツソ周辺で展開しており、ニジェールでも主要な農産物であるゴマ栽培について、これを機に勉強させて頂き、その成果やノウハウ等をニジェールの農業支援にも還元できればと考えています。気候条件も似通っている両国において、双方向で学びあえる関係を築くことができれば、活動範囲がニアメ市内に限定されているニジェールの現状に新たな風を吹き込むことができるかもしれません。今回の異動がその一助となるよう、両国の懸け橋となるべく奔走して参りたいと思います。

というわけですので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

(企画調査員 佐々木夕子)

プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介

■■みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト(EPT III)■■■

<http://www.jica.go.jp/project/niger/002/index.html>

みんなの学校プロジェクト群が作成しているビデオがもうすぐ完成します。そのビデオのうちの一つ『みんなの学校が開く世界、DREAM』を今回ご紹介します。

このビデオの主要な登場人物は、20代の女性教員と女性看護師、そしてニアメの進学校に通う高校生です。彼らには2つの共通点があります。ひとつ目は、10数年前、西アフリカにあるニジェールのタウアという州でとても厳しい状況の中、学校には通っていたことです。少女であった女性教師ハリマトゥは、家や育児の手伝いをしなければならず、学校を休みがちでした。やはり少女であった看護師も、親や回りから女の子は勉強しなくていいと言われ、学校を辞めさせられそうになっていました。今は高校生になったブバカルは文房具もノートも、机も椅子もない学校に通っていました。そのままの状態が続いていたら、学校を途中でやめていたでしょう。しかし、彼らは、勉強を続け、さらに進学し、それぞれの夢をかなえました。なにが彼らの状況を変えたのか。それは、学校に新しくできたCOGESでした。そう、COGESによって夢をかなえたことが、彼らのもう一つの共通点だったのです。

ビデオの冒頭、彼らが昔の自分を語るときの表情は暗いものです。それは彼らの置かれた状況がとても困難だったからです。しかし、一旦COGESのことを語り始めると表情は一変して明るくなります。それは、COGESが学校や村や彼らを取り囲む状況を変えたからです。COGES委員をみんなで選び、活動計画を一緒に考えて作り、実施するようになると、村の人たちは、学校や教育のことを考えるようになり、先生も校長も、住民・保護者と人々が何を学校に望んでいるのかわかるようになります。そうすると人々の教育や、学校に対する意識が変わり始めました。女の子の就学に消極的だったハリマトゥと看護師の両親は彼女たちを積極的に学校に通わせるようになります。ブバカルの学校では、COGESを通し、保護者・両親が協力して机や椅子を作り、文房具を買ってくれたので、生徒は勉強ができるようになりました。こうして、彼らの人生は変わったのです。ハリマトゥと看護師は夢をかなえ、ブバカルは医者になるというさらなる夢に向かって勉強しています。

これが、この物語のあらすじです。あらすじは予め考えられ、シナリオにも作者がいます。しかし、ビデオの中の彼らの演技は素人とは思えません。それは、シナリオが彼ら自身の物語をベースにしているからというだけではなく、彼らに代表されるその他大勢のニジェールの一般的な生徒の姿を描いているからだと思います。撮影を見ながら、彼らの言葉には、彼らの周りにいた子どもたちの言葉が乗り移っているように思えました。そのことは、他の役を演じてもらった、母親や村民、教員、COGES委員長なども同じです。こうした彼らの想いが、他の仕事で忙しい中、このビデオ撮影の準備をした専門家や、日本からこの撮影のために来られた映像メディアの制作者の方々にも伝わり、通常以上の手間と技術と思いを注ぎこんでいただきました。だからこそ、このビデオはニジェールの子どもたち、そして「みんなの学校プロジェクト」の夢を象徴するような出来栄えになったのです。ハリマトゥ、看護師、ブバカルの存在は、ニジェールの普通の子どもたちの中では、例外的だろうという人がいるかもしれませんが。残念ながら、その人の言う通りなのです。例えば、ブバカルは彼の同窓で、唯一の高校進学者です。他の同窓生は、数名中学校に行きましたが、ほとんどは小学校で終わるか、小学校をも修了できず、読み書きできないまま、学校を去っています。実際、最近の地域共通の学力試験で、ニジェールの小学生のほとんどが、基礎学力を付けられないまま学校を離れるということがわかっています。大多数の子どもたちに、質の高い教育を受ける機会を提供し、ハリマトゥ、看護師、ブバカルのように、自分の夢を実現する可能性を増やすという力は、COGESや住民にはありません。それは、COGESや住民を支援するみんなの学校プロジェクトが力不足であったということも意味しています。

これらの課題を克服するために、このフェーズでは、住民が支援する学力改善支援のモデル、補助金を有効に使い学習の質

を改善するモデル、中学校でもCOGESを通した質の改善を実現するモデルなどを試行してきました。これらのモデルが普及されれば、生徒に直接届く学力向上支援ができ、「夢」に少し近づけるはずですが、しかし、みんなの学校プロジェクトは、この5月に終了を迎えます。今の時点ですべてのモデルの普及が決まっているわけではありません。今後、みんなの学校プロジェクトのモデルはどうなるのでしょうか。私はそれほど悲観していません。

4月後半行われたプロジェクト成果の取りまとめのワークショップの中で、長く地方行政官の責任者でみんなの学校プロジェクトを外からみている人がこんな発言をしました。

「みんなの学校プロジェクトが変えたのは、制度やシステムだけではない、それは、自分たちの意識だ。」意識が変わり、みんなが同じ方向を向けば、現在のプロジェクトの方向性が推し進められていくと思います。そうすれば、もっと、大きな成果に結び付き、さらなるファイナンスが得られるでしょう。

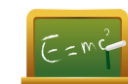
最後になりましたが、私が、シャトル型でこのフェーズのチーフアドバイザーを務めさせて頂いてきましたが、プロジェクトの終了前の4月22日にその任期を終えることになりました。この稿を借りて、プロジェクトの立上げから支援していただき、難しい局面でもプロジェクトの方針についての適切なアドバイスと支援をいただいた担当、基礎教育2課の課長、そして、現場での様々な手続や活動に細やかなアドバイス支援をいただいたニジュール支所の担当者や支所長に対し御礼申し上げたいと思います。さらに、プロジェクトの結果にこだわり、予想より活動が増大し、現場の専門家、現地スタッフの負担が増えてしまったことをお詫びするとともに、その活動を見事にこなし、成果に結び付けた手腕と努力に敬意を評したいと思います。特に現場の専門家の苦労は大変なものでした。プロジェクトの後半、増え続けるプロジェクトの活動に、常に冷静沈着に対応し、安定したプロジェクト運営を支えていただいた岩田専門家、4年間を通し、現状に対する豊富な知識と経験、そして的確な認識と、すばやく正確で圧倒的な仕事量で、すべての活動を完了し、想定以上の成果を上げることに貢献した影山専門家、この両専門家に対し、特に感謝したいと思います。ありがとうございました。



2016年4月22日
プロジェクトチーフアドバイザー 原 雅裕

第5回 誰でもわかるみんなの学校プロジェクトのモデル解説

～フォーラムアプローチ～



この稿では、“みんなの学校にはいろいろなモデルがあるが、区別がつかないし、内容もわからない。”という声に応え、みんなの学校プロジェクトのモデルを説明しています。興味のある方は是非一読ください。第5回目にご紹介するのは、第3フェーズのプロジェクトのタイトルである「住民参加による教育開発」をまさに具現化したようなモデル「フォーラムアプローチ」です。

前回のおさらい

前回は、住民参加で、教育の質の改善に挑んだモデル「質のミニマムパッケージ」のご紹介をしました。このモデルは、1) 住民・保護者と学校に対する教育の質に関する情報共有を可能にする学力テスト、2) 住民支援による補習、3) 優れた自習教材、4) 自習教材の学習を支援するファシリテーター、この4つの要素を重ね、生徒に直接アプローチすることによって、教員の力が不足している学校でも、学力を改善できる革新的なモデルでした。今回は、生み出された順序が戻りますが、もっとも住民による教育開発の力を見せることができるモデルです。

フォーラムアプローチを考えたきっかけ

このモデルを思いついたのは、タウア州の辺境の学校を訪問した帰り道でした。車窓の外は見渡す限り、荒野が続いています。少し、ぼんやりしていました。気が付くと「... が目にみえないな」と何回もつぶやいていました。モニタリングで訪問した学校で、見て思っていたことを無意識に呟っていたようでした。そこで見たのは、学校運営委員会を中心にした住民が、学校のトイレを総出で作っているところでした。ニジェールでは、もっとも暑い4月です。太陽の陽は、容赦なく照り付け、それは、暑いというより痛いという感覚です。しかし、その酷暑の中、人々は、楽しそうに歌を歌いながら、トイレを掘っていました。このエネルギー、このモチベーションはどこから来たのでしょうか。その頃、モニタリングのため、連続して多くの学校を巡回していました。どこの学校に行っても、村民総出で仮設教室や机や椅子、扉やトイレなどを作っている姿に出会いました。学校に入れば、住民が買ったノートやペンで勉強している生徒がいました。それは、ニジェールの人々の生活レベルから考えれば驚くような動員でした。「すごいな」と思う反面、こういった努力は、私が口や文章で説明しても、現場を見れない人にはわかってもらえないだろうなと思いました。だから、無意識に「住民参加」は、目に見えにくいとつぶやいていたのだと思います。どうすれば、彼らの努力や成果を見せられるか、わかってもらえるのかと考え続けていました。そしてそのつぶやきとともに思いついたのがフォーラムアプローチだったのです。

住民参加の力を結集し、その力を見せる方法＝フォーラムアプローチ

フォーラムアプローチの本質は、多くの COGES が統一したテーマで改善活動を同時期に行うことで、成果をまとめて見せることです。例えば、ある学校で、女子の就学向上活動をした例を考えてみましょう。そのキャンペーンにより、前年度より2名多い女子が就学したとします。その学校ではとても大きな成果ですが、その成果は全体から見れば、砂漠に落ちた一滴の水滴のように見えなくなります。しかし、この1校が1州1000校になったらどうでしょう。1州で2000名の女子生徒が一気に増加すれば、それは、女子就

学改善の成功例として認められます。住民の努力とその実力が正確に評価されるでしょう。

しかし、どうしたら 2000 校で同時に改善が起こるか。逆算していったどり着いた方法がフォーラムアプローチでした。2007 年当時すでに、学校レベルでは、活性化された学校運営委員会は、大きな求心力を持ち、情報共有の促進を梃子に、住民参加ができやすい状態を作りだしていました。設立され、それなりに動きだした学校運営委員会連合も、定期的開催されるその総会に各学校運営委員会の代表が集まり、その代表は、総会で議論された内容を各学校に戻って、住民総会を開いて住民に報告するようになっていました。住民⇄学校運営委員会⇄連合という情報共有のシステムが出来上がっていたのです。そこで、こう考えました。連合までメッセージがとどけば、それは各学校の保護者・住民まで伝わるのではないか。この仮説を検証するため、タウアに連合が 7 つくらいしかない時に、まずフォーラムアプローチの萌芽のような会合を開いたのです。連合の代表と州と県の教育省事務所の責任者と、COGES の担当官に集ってもらい、地域の教育の課題を話し合ってもらいました。そして、その時は就学機会の問題が焦点となり、7 つの連合とそのメンバーで同時に就学キャンペーンを行うことになりました。結果は大成功、各学校運営委員会が展開した活動は、7 つの連合のメンバー役 350 校で、同時期に実施され、9 月に行った事前就学希望者数では、なんと前年度の 3 倍もの候補者が集まったのです。しかも、もともと就学の男女格差が大きいタウアで候補者の男女格差はほぼ半々という輝かしい結果を出したのです。大成功のはずでした。しかし、フタをあけてみると結果は思ったほどではなく、男女格差はそのままでした。結果が伴わなかった理由は、予想よりも教育省が入学希望者すべてを入学できるほどの教員数を適切に配置できていなかったためです。そのため、増加数は教員の配置数分だけとなり、候補者の半分名前が挙がり登録されていた女の子が、入学時にはその三分の一は消されてしまい、入学率の男女格差はそのまま残ってしまいました。その後、改良を加えたこのモデルは、連合の普及とともに、全国で実施されるようになり、入学率の男女格差、卒業試験合格率など、めざましい成果を上げていったのです。

モデルの改善

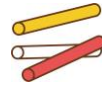
第 2 フェーズまで、大きな成果を上げてきたフォーラムアプローチですが、その開催は外部資金に頼っており、より継続的で現場に適した形に改良したのが、今フェーズ実施した「州教育フォーラム」です。この新しい形のフォーラムは、フォーラムを地域の教育開発の手法として根付かせ、その欠点だった持続性の問題を完全しようとしてきました。実証の結果としては、若干の問題は残したものの、全体的には、持続的に地域の教育開発の核のなる大きな可能性を見せたと思います。機会があれば、この新しいモデルについても説明したいと思います。

汎用性はあるのか

素晴らしい効果を残しているフォーラムアプローチですが、モデルに汎用性はあるのでしょうか。いままでの項で普遍的モデルの定義は、「普遍的モデルは普遍的ニーズに対し、すでにその効果が証明されている原則を適用化した改善策をもつ」というものです。これに対しこのモデルは、どう評価すべきでしょうか。フォーラムのシステムは、組織の情報の共有や透明性を基礎としたネットワークを使ったメッセージの拡散という常識的で、効果が確認されたやり方を使っています。一方、フォーラムに普遍的なニーズがあるかどうか、フォーラムが取り上げるテーマは、就学促進、学習の質の改善等、保護者・住民には普遍的なニーズであると思います。しかし、フォーラム自体に、強いニーズを感じている組織は、国を始めとしてあまり多くないようです。それが証拠に、現在までこのフォーラムの開催費が教育省で予算化されたことはありません

し、制度化の動きもありません。現在までの経験を振り返ると、いくつかのドナーが自己のアプローチを普及したり、浸透させることを目的として、その開催費を負担した例はいくつかあります。

フォーラムはひとつの手段です。フォーラムを使う主体がフォーラムに関するニーズを感じることができれば、フォーラムはひとつの大きな教育開発の枠組みとなり、有効な教育キャンペーンの手法になると思います。その意味で、この手法をめぐり、あたらしい試行が続けられていくことが必要であると思います。



チーフアドバイザー 原 雅裕

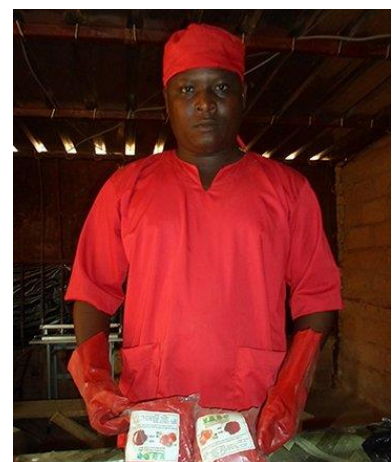
ニジェール国内の出来事 ～暑さをチャンスに！～

4月に入ってからのというもの、日中の気温はうなぎ上りで40度を超えない日はついになくなりました。今年の今頃は度重なる停電に悩まされ、茹だるような暑さの中で雨季の訪れをひたすらに祈っていたものです。

さて、今回はそんな厳しい暑さをチャンスに変えている頼もしい若者を紹介したいと思います。まず一人目はフレッシュ・トマトを乾燥させ、粉末にしたものを商品化したヤクバ・アルファリ氏（以下ヤクバ氏）です。

ニジェールの一般家庭や小売店にはほとんど冷蔵庫は普及していません。そのため暑さに弱い葉物野菜やトマト、キュウリといった常温で鮮度を保つのが難しい野菜の保存は特に難しく、青空市場や八百屋さんも、麻袋を水で湿らせて冷気を確保するなど、涙ぐましい努力を重ねています。しかし、4月、5月の熱気は容赦なくそうした人々の努力を打ち砕き、この時期店頭に並ぶ野菜、特にトマトなどは半分腐ってしまったような、見るも無残な状態で売られています。このような現状を打破すべく立ち上がったのがヤクバ氏で、炭で稼働する乾燥機を発明し、乾燥トマト粉末の商品化まで漕ぎ着けたのです。この若きヤクバ氏の挑戦は2013年に既に国内の最優秀若手発明家賞という形で実を結び、また2014年のフランコフォニー国際機関・政府・CTA¹共催によるアグリビジネス・コンクールに自身のビジネス・プランを応募したところ、なんと5000€もの資金を獲得したのです（！）。さらに昨年12月にパリで行われたCOP21でも「気候（変動）に対する解決策」として自身の商品を紹介するなど精力的に広報活動を展開しました。その甲斐あってか、これまで15トン近い大量のフレッシュ・トマトの粉末を全て手作業で袋詰めにするという、まさに気の遠くなるような工程が、銀行の融資により機械化できる可能性も出てきました。こうして着実に一步一步、夢を現実のものにしているヤクバ氏のほぼサクセス・ストーリー。これからのさらなる飛躍を期待したいところです。

世界を股にかけていた先のヤクバ氏とは次元が異なりますが、もっと身近な、地元レベルで酷暑に活路を見出している若者が次に紹介するハルナ氏です。彼はニアメの土木建築材などを販売しているカタコ市場で、日中いっぱい働いていますが、その合間の数時間を冷たい水（または氷）の袋売りに充てています（こちらでは、なぜか“ピュア・ウォーター”と呼ばれています）。この時期は停電に加え、断



製品を紹介するヤクバ・アルファリ氏
（4月8日付 『Le Sahel』）

¹ Le Centre technique de coopération agricole et rurale (CTA)：アフリカやカリブ諸国とEU諸国からなる国際機関。

水も頻繁に起こるため、ニアメのいたる地区に「ピュア・ウォーター！」という声がかまし、ハルナ氏のような青年がクーラーボックスなど頭や、手押し車に載せて練り歩きます。ハルナ氏によれば、暑い日は数時間で 1000Fcfa(約 200 円)ほどの売上になるので、給料も節約でき、その結果自転車や携帯電話を購入することができたと嬉しそうに話していました(4 月 7 日付『Le Sahel』)。

厳しい暑さをビジネス・チャンスに変える、そんな第二、第三のヤクバ氏やハルナ氏のような若者が次々と誕生し、この国の発展を推し進めていって欲しいと思います。

(企画調査員 佐々木タ子)